

『教育経営』特集 創造力を伸ばす教育 一九六八年二月（日本文化科学社）

# 学力と創造力

日本生産性本部プログラム教育研究所長

矢口 新

学力と創造力という表題を与えられたが、最近、創造性の開発とか教育とかということが問題になっているから、そういう点を考えてみようということであろう。創造力を開発することとは、学力を向上させることとどういう関係にあるのか、学力というのは創造力といわれるものを含んでいるのかどうかなど、いろいろな問題がありそうである。

まず、事実即して学力とか創造力とかを整理してみよう。学力という言葉にきわめて近い言葉に能力という言葉がある。人は生まれつき外界に反応する能力をもっている。先天的な反射活動の能力である。たとえば、赤ん坊でもおなかがすけば、オギャーオギャーと泣きだす。母親がオッパイを与えれば、吸いついて飲む。

おなかがいっぱいになると、オッパイをはなしてすやすやとねむってしまう。そういうことができる能力をもって生まれてきている。生まれつきそなわっている反射活動の能力は、そのほかにもたくさんある。針で足先をさされると飛び上がる。これは別に訓練したものではない。飛び上がることは歩くようになってからできないが、歩けないときでも、足を動かすことはする。

こういう能力は、生活して成長してゆく間じにだんだんと変容していく。生まれながらもっている反射活動が、具体的な環境に具体的に適応してゆくようになるのである。赤ん坊を抱くと抱きぐせがつくといわれる。これは赤ん坊が生まれつきもっている能力が、次第に具体的な環境に適応するようになるからである。これは

赤ん坊が学習したということである。また、学習ということとは、本来はこういう場合に使うのである。赤ん坊が新しい生活環境に適応する行動を習得したことを、学習した、学習が成立したというのである。

学力というのは、厳密に、かつ純粹に使えば、学習によって変容した能力というべきであろう。しかし、一般にはそのように使われてはいない。それは学校で学力調査などというときに使われるので、そのような限られた能力に対してだけ学力という言葉を使う習慣が成立したからである。それを別に取り立てて言う必要はないが、本質的な使い方を心得ていないと問題がおこることがある。それで問題がおこった場合に混乱するのである。たとえば、算数とか国語とかの学力を調査するといっても、ただ純粹にそういうものを調査するのではなく、子どものころから積みあげて学習した能力を調べるのであって、そういうもののうえに算数とか国語の学力も成り立っているのである。調べるときは、そういうものの全体を調べるのである。ぎりぎりのところになると、必ずしも国語、算数の能力というものだけを抽出することはむずかしいところがあるのである。それをただ観念的に考えると、ほんとうの姿を見失うおそれがあるのである。

## 二

創造力というのは能力であろうか。創造する「力」というような言葉を使うから、これも能力であるというように簡単に考えがちである。そして、能力とか学力とかいうものを、共通したものと考えがちである。しかし、そのように考えてよいものであろうか。創造力を能力の中において考えるなら考えてもよいが、それはそういう性格のものであろうか。

常識的に創造力があるとかないとかというときには、他人のまだやらなかった仕事をした、考えなかったことを考えたりするときに、あの人は創造力があるなどという。つまり、社会の場で他の人と比較した場合に使われる言葉なのである。またそういう場合に、その結果、他の人のやらなかったことをしたということが生じた原因が、その人の創造力という能力にあるという考え方は、必ずしも厳密なものではない。

創造というのは、ある行動の結果に対して、それが他の人によってやられたことがない、考えられたことがないときに創造的であったというのである。これは発明家とか天才とかを期待する感情と相通するものがある。現代の社会にそのような感情があつて、それを土台にして

創造性の教育が叫ばれていることは確かである。その気持ちはわかるが、それで創造力を追いかけてまわしても何も出てきはしないのである。

## 三

教えられたとおりのことをやるのは創造ではないと一般にいわれている。人間には教えられたとおりをやる場合がないわけではないが、またそんなにまったくおなじこととというのが出てくることはないともいえるのである。総じて技能といわれるようなことは、まねをするこゝとで、おなじことをくりかえすことでやってゆける場合が多いようである。昔の徒弟教育というものは、そういうことを土台にして成り立っていた。職人というのはそういうものの考え方をするものであった。まったく同じようにまねをすることを技能の伝達というように考える世界があることは確かである。

たしかに、これまでの多くの名人じようずといわれて一芸に秀でた人が、若いころはまったくまねをすることに精魂をうちこんで修行をした人に多いことはよく知られている。名人じようずといわれて一つの風格をなした人は、もう他の人にまねのできないものをもっている。独自のものをつくりだそうとしてだしたもの

でなく、むしろ若いころ、ひたすら先輩のまねをしようとして努力した結果そうなったということとを考えると、一概に教えられたとおりにやるのは創造ではないといっていられないような気がする。教えられたとおりにまねをしているのが、創造につながるものではないだろうか。すると、創造性を養う教育というのは、なかなかむずかしい問題になってくる。

非常に厳密に言えば、教えたとおりにしか行動できない人間というのはまずいない。場面に多少の違いがあつても、適応できるのが人間である。純粹に同じことというのは、二回とおこらないものである。よく歴史の一回性などというが、歴史などと大きなことをいわなくても、人間の出合うことに同じことは二度とはないのである。その意味からすれば、あることを教えられたとおりにするといつても、まったく同じ場面で、同じことをしているのではない。それは行動の基本的な態度が同じだということなのである。概して、同様な行動といった方が正しいのである。

人間が行動を学ぶのは、ただ形を学ぶのではない。どちらかといえば行動の仕方を学ぶのである。それだからこそ、違った場面でも適応できるのである。これをおしひろげてゆけば、だんだん創造性の問題に近づくことができる。つ

まり、物の見方を身につけていれば、いろいろな物を見ることができ、ただ一つのもの、これは何であるか教えられただけでは、物を見る力は働かない。

物を見る見方を身につけるには、具体的に物にぶつかって物を見なくてはならない。そしてそれが一つだけ見るのではなく、他のものと比べてみるということが必要である。たとえば、茶のみ茶碗を見るとする。それだけを見ているだけでは見たということにはならない。ご飯茶碗と比べてみて、そのものが何であるかがわかるのである。それは、実は、茶碗の種類に対してどのように見るとかという見方が身についたことなのである。大きさを測定したり、形を測定したりして、そこから茶のみ茶碗であると判断する力を身につけさせたのである。つまり、茶のみ茶碗とご飯茶碗とを区別する尺度をもたせたのである。こういう尺度をもって新しい事態に対決して、はじめてものを見つけてゆくことができるのである。それはけっして教えられたとおりに行動していることではない。自分自身の行動をとっているのである。それは少なくとも、本人にとっては創造的な行動だといつてよいであろう。

#### 四

ものの見方や考え方を習得するというのは、そういう見方とか考え方とかを観念的に教えられるというのではない。物を見、物と対決して考えることによつて、そこから会得していくものである。つまり現実の事態に対決して身につけるのであつて、考え方、見方を身につけるということは、物に対してのある見方、考え方で見たり考えたりすることから成立するのである。具体的なものに対して、その考え方を適用することを通じて、それが定着するのである。

前に、人間が生活環境の中で、周囲にあるものに対決してながら、行動の仕方を変容させていくのが学習であるといったが、それはある意味で、新しい世界にぶつかつて自分の行動の仕方を創造していくことなのである。同じことは二度おこらないから、人は、たえず新しい世界にぶつかつているのである。そこで、たえず新しい行動をつくりだしているということが出来る。たえず現実によつつかつて行動していくところに、創造する力が養われると考えたらよいであろう。いや、新しい現実に向かつて行動することが、新しい行動を生み出すといった方が正しいかもしれない。

創造的であろうが、なかるうが、人間の行動

は現実との対決の中に進行しているのである。現実が新しいものであるなら、行動も新しいものでなければならぬのである。現実にも最適した行動を生み出すのが、人間の行動の本来のあり方なのである。だから、現実にも最適した行動をしようという態度があれば、おのずから創造的な行動となるといつてもよい。また、同じ現実とは二つとないのであるから、常に新しい行動でなければならぬはずである。また、そこに苦しさがないければ、それは行動をする態度にまちがったものがあると考えなければならぬ。つまり、新しい現実が目の前におこっているのに、それを新しい現実としてみる態度がなく、前にあつた現実とまったく同じだと見るからであろう。それは目の前の現実を正しく測定することができないということであろう。そして、新しい現実であるにもかかわらず、自分の過去に出合つた古い現実と同じものとしてみてしまうのである。それは、現実を自分であやまってねじまげて見ているのである。また素直に見ることができないのである。

天動説から地動説へかわつた時代のことを考えてみよう。人びとは現実の見方があさはかであつたから天動説を信じていたのである。というのも、人びとは現実をみていなかったからである。そして、現実を正しく測定した人が地

動説をとなえたのである。それは創造力があつたというより、正しく現実に迫つたと考える方が正しい。何物にもとらわれないものを見る態度（習慣）があつたといった方がよい。そういう行動の仕方をする人が、正しい見方としての地動説を生み出したのである。

創造するというのは、無から有を生じさせることではない。最も正しい、適切な行動の仕方で行動することである。とらわれざる見方で世界を測定し、それによって行動することである。そして固定した考え方を押しつけられても、それに圧殺されないことである。

現代の教育は、そういう態度を教育しているとは思えない。どちらかといえば、固定した観念を植えつけようとしている。自然はこうなっている、世の中はこうなっている、こういうものだということを教えこもうとしている。それをおぼえていればテストに合格するのである。こういう教育をすることによって、正しく現実に直面して、それを正しく測定し、それをもとにして行動するという態度を失わせているのである。いわゆる知識教育という観念教育が、人間に創造的に行動させることを阻害しているのである。これは現代教育の弊害である。

## 五

創造性を養う教育というと、教えこむ教育を否定する。以上述べたような意味で、空虚な観念、固定した観念を教えこむ教育は否定しなければならぬ。しかし、それでは教えなければならぬことはないのであろうか。現実を見ること、現実を正しく測定することは徹底的に教えこまなければならぬのである。この辺のところ、現在の教育では混乱していて、ともすると教育不在になりがちなのである。創造といっても、まったく無から生ずるのではない。過去に積みあげられたものの土台の上に、それを否定するものとして新しい考え方、見方が生ずるのである。現代は、これまでにづくりあげられた科学のうえにつくられているのである。その見方のうえに新しい見方が生ずるのである。これまでの物の見方、考え方が十分にこなすことができなくては、新しいものを創造することはできないのである。

現代の教育は、そういう物の見方、考え方を訓練する教育ではない。むしろ結論を与える教育である。結論でなく、プロセスがたいせつなのであるが、しかしながらプロセスは無視されているといつてよい。これは教育としては逆の方向を向いているのである。これもテスト主義

が生みだした教育の姿なのであろう。

現実に対決して正しく測定し、正しく行動することは徹底的に訓練されるべきことである。一通りはやってみるなどということでは現実に対処することはできないのである。何回もやってみて、即座に測定するというスピーディーな行動をつくりあげなくては、現代の科学技術がつくっている世界をこなすことはできないのである。ところが、現在の教育は結論を与えることに主眼をおいていて、結論を与えるために、通り一ぺんの説明だけはする。それをわからせるために説明はするけれども、それがわかってゆくプロセスを真剣にものにさせようとはしない。これでは、現実に対処する能力、行動力は身につかないのである。

人のだした結論をおぼえるのが教育であると考える習慣が、みずから現実に直面して、自分で測定し、自分で納得のいく行動をしようとする態度を阻害する要因となっている。

こういう考え方の地盤のうえで、創造ということを考えて、それは単なる思いつきになってしまう。根拠のない思いつきとは、つまり現実に直面して、その正しいはあく、から積みあげた結論でなくて、自分のもっている観念の中だけでのこねまわしを思いつきとして提出することである。現代の学校教育で、生徒にものを

言わせる時の形は、このような思いつきを言わせることが多いのである。そういう思いつきがたいせつなのではなく、それに至るまでのプロセスがたいせつなのであるが、それに目が向いていないのである。その結果として、できそこないの思いつきを尊ぶ風を人間の中につくってしまっている。こうして軽薄才子が世の中に氾濫することになるのである。

これは、特別な創造力などというものが人間にあると考えるからであろう。そういうものは人間にあるものではない。あるとすれば、人間はすべてもっているはずである。それが働くのは、正しく現実に対処することによって、働くのである。それなくして何か特別なことを思いつくのではない。

## 六

学力というものは、現代では固定的に考えられている。学力調査などというものが調査している学力は、きわめて一部のことである。しかもそれが現代的な考え方では、物を見る見方、考え方ではなく、結論的なことをおぼえているかどうかということに重点がおかれている。そういうところでは、人間が現実に向って、正しく物を見るときという態度そのものが軽視されがちである。これでは、正しく現実をみてゆくと

いうことが、一般の人びとに重視されなくなるのは当然のことであるし、そういうところでどうして現実をみて、それを明らかにしてゆくということが起こってこようか。創造とは、常に新しい現実が掘り起こされて、一步一步前進してゆくことである。そういう行動をとることによって、創造的なものが結果として出てくるのである。結果をいくら望んでも、そのプロセスが正しくなければよい結果は生じないのである。この基本的な態度を忘れて、ただ創造性ということだけを望んでもだめなのである。

現代の教育では、正しく行動させるという考え方が失われている。つまり人間の行動力を育てるのが一番たいせつな教育であるのに、その観点が失われてしまっていて、人間が知識というものの容器であるように考えられている。知識というものが、人間からはなれて存在するもののようにおぼえこませようと考えるのもまちがっている。知識とは、人間の行動からはなれて存在するものではない。それは人間が外界を正しく測定し、正しく表現するという行動以外の何物でもないではないか。知識は与えるとか与えられるというものでなく、みずからの行動によって身につけるものである。

学力とは、そういう行動のことなのである。

行動力としての学力を身につけるといことが、つまりその行動力によって、現実をより正しく把握し、正しい見方、正しい行動の仕方を生み出すのである。そういうこと以外に創造力というものがあると考えるのはあやまりだと思ふ。

天才は努力の産物であるという。天才というものがあるかもしれないが、それはわれわれがつくることはできないものである。その与えられた天才が、現実に天才となるのは努力であって、その努力とは、いかに現実に対決し、現実を正しく見るかということに向かつて努力することであろう。そういう努力をさせるところに教育があるのであって、正しい行動の仕方、世界の見方を訓練する教育が、天才を天才たらしめるのである。しかし、それは常人がみなそういう教育を受けるところに生まれる可能性として見ていなくてはならない。創造力を養う教育というような言葉は、軽々しく使用すべきではないように思ふ。